

サロン・あべの

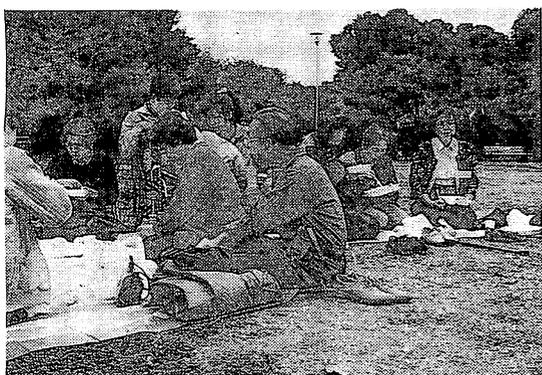
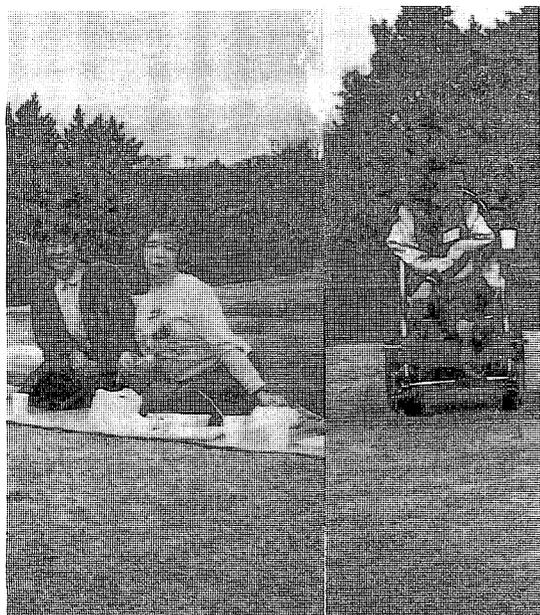
<サロン・あべの>NO. 18

昭和62年12月5日(土)発行

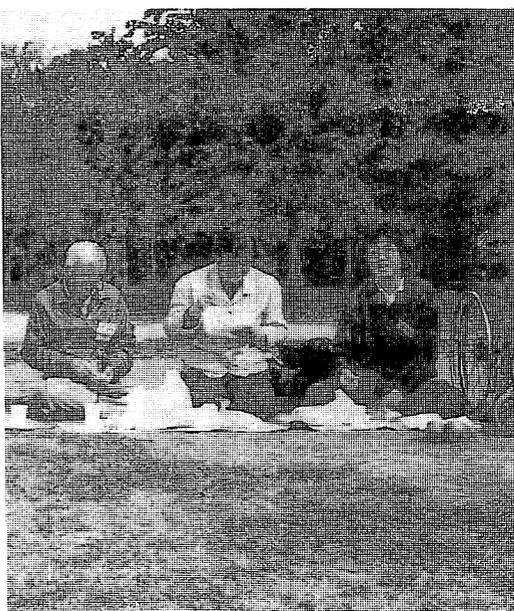
ボランティア・スクールの交流会に参加

11月の出会い

あべのボランティア・ビューロー、阿倍野区老人福祉センターが主催するボランティア・スクールのカリキュラムのひとつ「交流会」——みんなで楽しくミニハイキング——が、十一月十四日(土)長居公園で行われた。同スクール受講生、たんぼ、作業所、阿倍野区老人福祉センター、サロン・あべのからあわせて五十名が参加。昼食を共にし、宝探しゲームやマイムを踊って 晩秋の昼下がりのひととき遊びごころを解放した。



なごやかに お弁当のひととき



遊びごころを解放!

「交流会」について、主催者側からあべのボランティア・ビューローの前田博子さんに、参加者側から受講生 湯浅真佐子さん、サロン・あべの 柿岡夫妻、上田夫妻、富田慶子さんにお願ひしました。

感激の連続だった交流会

湯浅真佐子

十一月十四日の交流会は、私にとって、とても意味のあるものでした。

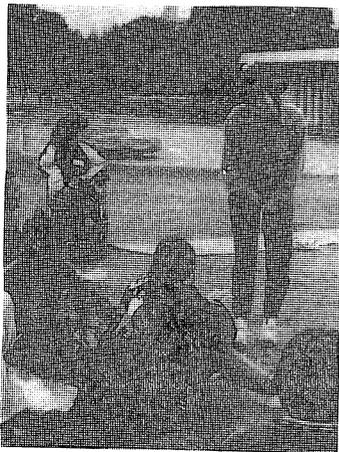
最初、お年寄りの方や障害をもった方とお話してもできればいいな…。と、ぐらいにしか思っていなかった私に、「湯浅さん、齊藤さんのこと、お願ひしますね。」という言葉は、とても不安でした。何をお話しすれば良いのか、どうしたら安心していただけるかがわからず、一つ一つの行動をするたびに迷っていました。しかし、他の方

のおかげもあり、齊藤さんとは、とても仲良くなれたような気がします。

その他のお年寄りの方や障害者の方とも触れ合うことができて、とても楽しかったです。

勉強になることも、いろいろありました。ボランティアスクールで習った車椅子介助も出来て、その他介護するという行動が一つずつ身についたと思います。周りのみなさんが、私に話しかけて下さることもうれしく思いました。何をしても、感激の連続でした。

交流会で経験したことは、これから障害児保育、社会福祉を勉強する私にとって、



ずっと残っていくことだと思えます。お年寄りの方、障害者の方の気持、福祉の仕事の大変さ、楽しさが少しでも、わかったような気がします。

また、こういう機会があると参加して、いろいろな方とお付き合いが出来れば...と思っっています。

ボランティア交流会に参加して

柿岡 忠



身障者と、おとしより、そして、ボランティアとの交流会に参加して、身体障害者の中にも 多種多様の障害を持っていることを知りました。

そして、視力障害を一つ取ってみても、視力の程度で行動や動作がずいぶん違ってきますが、肢体障害においては、その部位の障害により、行動がずいぶん違ってきます。それらの人々が一同に集り、理解を持

交流会開催への思い

あべのまゆみ・ピロー

前田 博子

あべのボランティア
・ビューローでは年に
一回、ボランティア・
スクールを開催してい
ます。つまり、ただ「
V活動をしたい」と言
ってビューローを訪れ
てくれる人を待つだけ
ではなく、スクールを
開くことよって「V
活動してみませんか？」

と皆さんにお誘いする
わけです。「V活動っ
てこんなものですよ」
と6〜7回の講義の中
でその概要を説明して
しまおうというものな
のです。

しかし！ただかだか6
〜7回。ましてや難し
い話、身に覚えのない
体験談...。やっぱり、
「V活動って何なんだ
？」と、首をかしげた
くなるんじゃないかと
思うのです。

そこで、スクールの
一環としていろんな人
に接する体験をしても
らおう、と考えたのが
今回の「交流会」でし
た。なんのことはない、

やってみれば「ああ、
こんなもの」「難しい
ことではないんだ」と
思ってくればしめた
もの...

V活動をする人を増
やすことだけがVスク
ールの目的ではない、
「V活動」と大声をは
りあげなくてもちよっ
とした手助けができる
人を少しでも増やすこ
とができれば大成功！
そういう意味で、この
交流会に参加してくれ
た人たちはその手助け
をする「勇気」を他の
人よりも少し強くもっ
てくれたんじゃないか
と私は大いに期待して
いるわけです。



つというのは、大変大切なこと、思います。

お互いが、良く知り合いながら自然の草木に囲まれた、太陽のもと、芝生をなせ、落葉を踏みしめる…外気にふれることのもっと楽しいことでしょう。

ボランティアの方々のお心のこもった計画により、有意義な集りでした。

お互いに良く知り合って、弱者同志、助け合って、実世間に出て大いに活動しましょう。

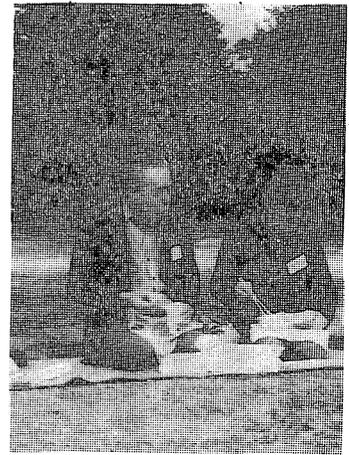
ボランティア交流会に参加して

柿岡 緑



秋深く広大な植物が生い茂る地に富田様のお誘いを受けて、楽しい一日を送らせていただきました。

植物園集合場所に行きますと、私と同じく車椅子のお方が多く待っておられ、心安まる思いがしました。



豪華に咲き誇る菊花や、美しく咲きみだれる色とりどりのお花を眺めさせていただきました。

皆様と共に楽しいお弁当をいただき、又、ゲームもとても面白うございました。

私共のC班は、一番ヒリであったことも笑いの一つでした。

自己中心もかえりみられず、私共のためにご援助下さるボランティアの方々のおかげで、こうして行事にも参加させていただけることを常に深く感謝致し、又、私達も与えられた機能をよく訓練して、楽しく元気に社会に参加させていただきたいと存じます。

サロン・あべのをいつも頂戴致しております。毎月のご編集・発行は、さぞかしお大変のこと、存じ上げます。ますますのご発展をお祈り申し上げます。

今回のボランティア交流会に参加させていただき、どうも有難うございました。

日々のよろこび添えて

友の笑顔は 心の宝

今日一日に 全てをかけて

明日も又手を取り合って

行きましよう 細い道

細い道からだんだんと

やがて見えて来る 広い道

友と共々求めて どこまでも

つぎる事はない 人の道を

ハサロン・あべのVに贈るハ灯

十一月のカンバ合計八四四六円

ありがとうございます。



ボランティアスクール交流会に参加して

上田 敏

十一月十四日(土)あべのボランティア・ビューロー主催による、ボランティアスクール交流会(ミニハイキング)に、サロン・あべのを通じて、初めて妻と二人で、参加させていただきました。私達夫婦は、重度障害者で、毎日自分達の生活に追われ、今まで、なかなか、こういう行事に、参加できませんでした。結婚して二年半近くなり、お互いに少しずつですが、生活にゆとりが出来る様になり、今回初めての参加となりました。

あいにくこの日は、朝から曇り空が続き今にも泣き出しそうな天気でしたが、皆さんの願いが、天に通じたのか、雨だけは降らなかったで、良かったと思います。

ハイキングなど、ここ数年、行ったことが無かったので、心弾ませながら、植物園玄関前に集合、皆さんと一緒に、芝生広場へと向いました。少し肌寒かったですが、とても心地よい風が吹く中、約二十分ほどかけて、芝生広場に到着。そこで、皆さんと、楽しく昼食をしたり、ゲームをしたり、なんだか学生時代の事を、思い出したりしていました。最後は、フォークダンスで締めくくり、障害者と健常者が一体となって、素晴らしい思いでづくりを、したような気がします。

少し欲を言えば、これは、僕の意見ですが、ボランティアスクール交流会と言う名のもとで、行われた行事であるから、時間的な問題も、あると思いますが、障害者と健常者が、遊びだけの交流ではなく、もう

少し色々な事を、話し合える時間があればもっと、お互いに、理解を深める事が、出来たのではないかと思います。しかし、非常に楽しく、有意義な時間を過ごさせていただきました。

また、こういう行事がありましたら、よろこんで、妻と二人で、参加したいと思っております。

本当にありがとうございました。

笑顔こぼれる交流会

△サロン・あべのV十一月の出会い

富田 慶子



サロン十一月の出会い、あべのボランティア・ビューロー、阿倍野区老人福祉センターの主催するボランティアスクール受講生との交流会参加となりました。

老人福祉センター(十時三十分)集合組は、あびこ筋から、大島功・ケリア号・板子初子・斉藤孝文(車イス)さん方と私が





受講生の皆さん方と共に「なかよし」号のバスに乗り、直接組が待っている長居植物園前へと急ぎました。

サロン関係では、昭和町近くから奥様の電動車イスの手引で参加下さった柿岡ご夫妻、身障スポーツセンターで車イスサッカークラブに入っておられる上田ご夫妻、電動車イスで身軽に行動される山本篤江さんそして、いつも元気な中西利香さん、「遅れなかったよー」と明るい声の河合恵子さん、いつもの笑顔の石田律さん等が来て下さっていました。

全員が揃って門を入ると、今が盛りりの菊のけんがいが、かぐわしい香りで迎えてくれました。木の葉は、紅・黄に染まり、気の早い枯れ葉が、路上でカサコソと軽い音

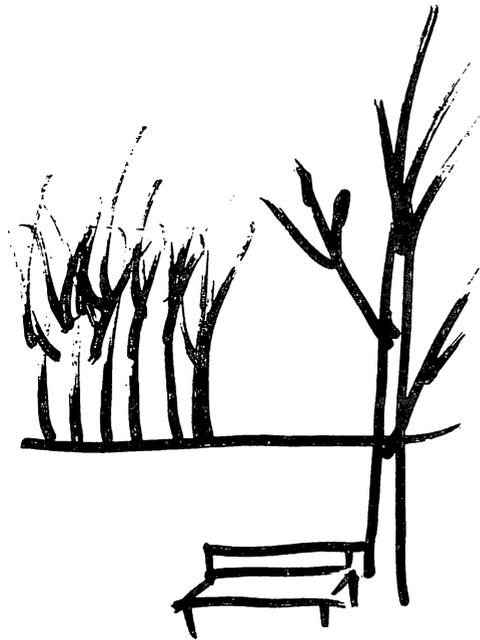
をたてゝいました。池には、アヒルやカモが賑やかに泳いでいました。右に左にと秋の風情を楽しみつつ、車イスを渡辺チカヨさんに押しさせていただいて芝生広場に着きました。車座にゴザを敷いて、心ずくしのお弁当をいただきました。青空の下でいただくお弁当の味は、格別のおいしさでした。

食事中に参加者グループの自己紹介があり、サロンのことは石田さんに云っていただきました。食後、グループ(A〜E)毎に分かれて芝生内を宝探しゲームで、隠された封筒四十枚を探しました。封筒内には、クイズ・ジャンケン・ゼスチャー

・合唱等、多種類の問題が有って、一問十点の得点が加算されていくのですが、中にはマイナス点のはずれ封筒が有ったりで、封筒の数が多いだけで、いちがいに有利と決められず、最後迄グループの順位が解らなくて面白かったです。仕上げに皆さんとホークダンスのマイムを踊りました。

帰りには、今日の記念にと紅色の落ち葉を拾ってもらい、ドングリもいただきました。多くの人々との出会いと共に、秋を満喫でき、本当に楽しい一日でした。

お世話になった皆様、ありがとうございました。



THE DEAF MUTE

9

旭 純子



み

4. 文化面

身近な文化であるテレビには、字幕・手話通訳付きの番組が少なく、ろうあ者は一般国民なみのテレビ文化の恩恵を享受できずにいる。昭和五十八年より実施された始めた文字放送も未だ全国的なものではなく、受信機は高額なので、ろうあ者にとって真に親しめるものとなっていないのが現状である。また、外国映画の日本語吹替えが進み、文字挿入が減少するなど、聴覚障害者に対する配慮不足が目立っている。

そのほかにも一般の文化的催し、例えばコンサート、講演会、講座等の多くは、ろうあ者にとって利用に供されるものではない。特に音楽、歌などの催しは、たとえ手話通訳を付けたとしても、健常者がうけるような感銘を受けることは少ないようである。

る。筆者は、三年間にわたり、「わたぼうしコンサート」の手話通訳に参加したが、歌のリズムを聞こえない人々に伝えることは、不可能なことのように思われた。

しかし、演劇芸能関係では、ろうあ者が主体となって自らの文化の創造を目指して手話劇、手話落語、パントマイム、太鼓等に取り組んでいる。その具体的な例としてトット基金「日本ろうあ者劇団」、岐阜ろう劇団「いぶき」、京都ろう劇団「ひびき」デフバベツトシアター「ひとみ座」などがろうあ者を中心に視覚効果を取り入れた独特の手話劇や手話狂言を試みている。大阪では、桂福団次氏のもとに十人近くのろうあ者が集まって手話による落語を演じているが、表情が豊かで、状況描写などに秀でた才能を発揮している者もおおい。

阿倍野区ボランティア交流会(第二回)

日時:昭和六十二年十二月九日(水)

午後一時三十分〜三時三十分

場所:育徳コミュニケーションセンター

一階ホール(場所変更になっていきますのでご注意ください。)

【阪南町五十一番五十二番】

参加費:無料

△プログラムV

○第一部(一時三十分〜二時三十分)

講演会「ボランティアと地域」

講師 佐藤 宣三郎 先生(精神薄弱者通所施設 大和川園々長)

○第二部(二時三十分〜三時三十分)

交流会

自立

(2)

ハンディを持つことによって、元気な人達よりも自立に関して、より大きな困難を伴っている障害者の自立への鍵は…。

旭 純子さんに現状と問題点をお願いします。

「親「きあと」の問題

旭 純子

自立ということについて考える時、それは必ずしもハンディキャプト（いわゆる障害者と云われる人達）だけの問題ではないと思います。今、こんなことを書いています私自身、とうてい自立しているとは云えないし、この頼りない娘を見て両親は、いつも「お前は、ひとりになったら、いったいどないするねん」といっても不安げな様子な

のです。ただ、ハンディキャプトの問題について特に、自立と社会参加、が取り上げられるのは、彼らがハンディを持つことによつて、元気な人達よりも自立に関してより大きな困難を伴っているからだと思えます。

この自立に関する意識をはっきりと持ち主張できることができるかどうか、ハンディキャプトの自立への鍵はそこにあると思います。

それは端的に云えば、「親がいなくなったら、自分はどうするのか？どうしたいのか？」という意識づけであり「そのために

自分がしなければならぬことは何か？」を考えることにつながると思うのですが、そういう、思い、を家庭内で両親や他の家族と、きちんと言合つことができるかどうかということになると、そんな家庭はあまり多くないのではないかと、短期間の経験上感じています。

多くの親にとつて、ハンディを持つ子供の自立を面と向つて考え、そのように育てていくということは、容易ではないし、従つて親は全面的に子供の介護者であり、子供にとつて最も、わかつてくれる、存在になつてしまう。重度であればある程、その

傾向は強いような気がします。

実際、重度者の家庭では、親以外の介護を受けたことがない、親以外の人の手から食べ物を口にしたことがないという、不幸なケースが実に多いのです。

不幸なケースと云ったものには、それなりの理由があります。最近問題になっている「親亡きあと」のことですが、こういう親以外の介護を経験したことの無い重度者が「親亡きあと」何らかの社会資源のもとに生活していく時、適応しにくい状態が起こってくるという話をたびたび耳にしたりますのです。ところが、親と話してみると「それでもしょうがない」等という答も以外に多く、「私らが死ぬ少し前にこの子に先にいってもらえたら一番いい」なんてことを云う親もけっこういて、せつなくなることもしばしばあります。

日本人的な親の人情が、そう云わせるのでしょうか、親にとって子供を残して安心して死んでいけるような社会であれば、そんな言葉が親の口から出ることはないと思っています。



残念ながら、いずれ来る「親亡きあと」の問題にいつもおびえながら、見て見ぬふり、「他人さんにめいわくをかけたくない」と限界まで頑張りがつづける親たちがほとんどなのです。

今の社会では、自立ということについて親や本人の要求をみたすための条件は、まだまだ未整備であると云えそうです。職業的自立ができ、積極的に社会参加していけるケースは、基本的に自立するというこのパターンが、人間の数だけあるという考え方で、なされていかねばと思うのです。

それは、今まで経験のないことをやってみる。例えば「料理は、包丁や火を使うから危ない」とやらせてもらったことがなかったから、まず、牛乳を加えてかきまぜるだけのデザート作りからやってみる。(それも立派な料理のほう)それを家族に食べさせてあげる。買い物をしたことがなければ、ちょっとボランティアと外出のついでに実際に自分の手からお金を払ってみる等ということからはじまるかもしれないし、寝たきりであっても、おむつをかえてもらうときに、かえ易いように少し自分の腰を動かしたり、持ちあげたりする。話ができないが、笑いかけている。そういう仕草のひとつだって、その人にとっての社会参加

であり、可能な限りの自立であるかもしれない。そういう小さな変化の積み重ねが、第一歩であり、それを見つけられる目が周囲の人達には必要なのではないかと思ってしまう今日此の頃です。

自立について考える時、思うことはどこかの講演である先生が云っておられました、ハンディを持った人が自分のライフサイクルに応じて、ある時は在宅で、ある時は地域で、ある時は施設・病院でと自ら選択できる社会であってほしい、ということ

です。
そして、自らの意志で選択できるだけの考え方まで高めるには、家庭内で、地域でこの問題を避けるに、話しあえるだけの土壌作りをする必要があるのではないかと感じています。

なんて、わかった風なことを書いてしまいました、かく云う私も「親亡きあと」を考えると、目をおおいたくなる程自立できておらず、我ながら「なるようになるサ」なんて、のんきにかまえている時期ではないことに気づいてしまいました。明日からは、少し真剣に考えてみたいと思います。

編集後記



あべのボランテニア・ビューローの、ボランテニア・スクールの講座のひとつ「視覚障害者の誘導」で、手引きの仕方について、③基本的な姿勢 ④狭い場所では… ⑤階段の昇り降りは… の説明とそれぞれ

の注意点を受講。そのあと実習で、目をぶつて、実際に街中へ出た。机上どおり、手引きをしてもらいながらふと思った。「こゝで、もし自分が危いと感じたら、目をあければしまい… 健常者に戻ることが出来る」また「この実習が終った時点で健常者にもどる」
自分の心の隅のどこかにある「もどれる」という気持は障害をもつ人に、どう映っているだろう。心寒くなった。(一石)

にぎやか新年会

サロンあべの 1月の例会

日時：昭和63年1月16日(土)
午後12時～3時
場所：あべのベルタ地下2階『鳥兆』
会費：1人-1500円
申込み：電話(06)691-1028 富田迄
締切：昭和62年1月10日



<サロン・あべの>第18号
発行日 昭和62年12月5日(土)
発行・編集<サロン・あべの>運営委員会
[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028富田慶子]
印刷 セルフ社 電話(06)652-0337